

内部被ばく検査最終報告会を開催しました!

市では、放射能対策の1つとして、平成24年7月から12月にかけて、4歳から中学校3年生の子どもたち8505人を対象に、内部被ばく検査(ホールボディカウンタ検査)を実施しました。

その結果報告会として、2月3日に「放射線測定から見えてきた過去・現在・未来」と題し、東

■講演会要旨

7468人が受検し、市内の小中学生の受診率は85%。これほど高い割合で実施している自治体は福島県にも少ない。大勢の人が検査を受けたからこそ見えてくる結果がある。

現在のホールボディカウンタ検査は、2011年3月の原発事故の初期被ばく検査ではなく、日常的にセシウムを食べ続けているかどうかの検査。

牛久市の土壌汚染度(地表面へのセシウム137

の沈着量は一部3万〜6万ベクレル/m²のエリアを含んだ地域(文部科学省の航空モニタリン



講演会で結果報告をする早野龍五さん

京大学大学院理学系研究科教授、早野龍五氏を講師に迎えて講演会を開催しました。

検査結果から見えてくる牛久市の状況や検査の意義についてのお話と、市民の皆さんの不安や疑問についても数多くお答えいただきました。

グよりもあるため、内部被ばく検査を行った意義はある。

ホールボディカウンタ検査の検出限界が1体300ベクレルであることから、「不検出でも体にセシウムが入っているのか?」という質問が多いが、

①ゼロの証明は不可能

②しかし、大勢が検査をしたおかげで、「全員が300ベクレル」でないことが分かる。(仮に全員が300ベクレルだったとすると、受検者の半数が不検出、残りの半数は300ベクレルを超える結果になったはず。今回の結果から、仮にあったとしても値ははるかに少ないはず。それは統計的に明らかで大勢で測ったからこそ言える結果)

③300ベクレルは十分に低い数値(表1...8歳の人が、仮に300ベ

クレル体の中にあつたとすると、1年間の実効線量は0.04ミリシーベルト。食品安全委員会が1年当たりの食品由来の内部被ばくを1ミリシーベルト以下とする目標の25分の1程度となる)

問診の結果からも、受検者の4分の3が食べ物に気を使っているという結果がある。今後も自家栽培野菜など放射能検査をしていない食品に注意していくことが大切。

■表1. WBCで300Bqだった人の内部被ばく線量と一日のセシウム摂取量推定(Cs-137のみの計算)

	<1歳	1~3歳	3~8歳	8~13歳	13~18歳	成人
実効線量 mSv	0.10	0.07	0.04	0.02	0.01	0.01
摂取量 Bq/日	13	16	10	6	3	2

今回WBC対象外

※市では、内部被ばくを予防するため、今後も食品の検査を進めていきます。家庭菜園などの測定は随時受け付けています。また、家庭の食事が気になる方には、陰膳検査(1日分の食事を1食分多く作り検査する)も受け付けています。どつでご利用ください。

※講演会で使用されたスライドは <http://www.slideshare.net/RyuHayano/20132-16395031> でご覧になれます。

ホールボディカウンタ 検査結果について

検出限界未満 7468人(100%)
受検者数 7468人(男性3532人、女性3936人)

実施日 平成24年7月7日〜12月15日
実施対象者 4歳〜中学校3年生(8505人) ※未就学児は保護者も実施。

【内訳】15歳以下6629人(小中学生5728人(在校生の85%)、未就学児901人(対象の52%))

実施場所 (公財)震災復興支援放射能対策研究所(福島県石川郡平田村)

使用機器 FASTSCAN2251 (CANBERRA製)

検出限界 Cs-134...300Bq/body
Cs-137...300Bq/body

■図1. 年齢別受検者数

